

人間科学、表現文化における 「民族誌的転回」をめぐって

「民族誌的転回」を主題とした本プロジェクトでは、本誌前号では海外からの二人のゲストのプレゼンテーションをすでに発表し、また奄美大島で行なったイベントについても、その記録が雑誌「山口山脈」（国書刊行会）に掲載される予定である。ここでは理論とアートにおける「民族誌的転回」について、それぞれ独自に考察した二論文を掲載する。

「民族誌的転回」という問題設定は、第一にフィールドや聞き取り調査を通して、学問や表現の主体の「位置」を問いなおすことを目指す。第二に理論的言説と詩学、美学の絡み合いを自覚的に分節化しようとする。人類学においてはジェイムズ・クリフォード、美学批評においてはハル・フォスターがこの語を用いている。両者とも、民族誌的な身ぶりが現在の人類学や現代美術においてもっている意味を問題にしており、特にその視点が調査対象としての社会から、自らが生きている現代社会に遡行する場合の諸問題を論じている。

ここでは思想史や精神史にこの視点を持ち込んだ場合についての考察を上野論文があつかい、美学／現代美術における問題を野々村論文があつかっている。